

〔論文〕

# 乳児保育における保護者支援研究（1）

—連絡帳の記述文字数及び保育士—保護者間の応答率の分析—

丸 目 満 弓  
Mayumi Marume

子育て支援ソーシャルワーク研究所

2017（平成29）年に改定された保育所保育指針では、「乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実」「保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性」などが改定のポイントとして挙げられている。その意味において、乳児クラスを中心に古くから行われている連絡帳は保育のツールとして捉えられることが多かった連絡帳を、保育士が保護者とともに子育てを行うツールとして、さらに保育相談支援のツールとして捉え直し、活用する意義は大きい。

本研究では保育所で実際に記入されている連絡帳の記述内容に対して分析を行い、保育士が連絡帳を通じて行っている保護者支援の実態把握を行った。調査全体としては、①記述文字数、②保育士と保護者の応答率、③記述内容のカテゴリー分類、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無の4つについて明らかにしたが、紙面の関係上、本論文を連続した研究の（1）と位置づけ、分析①及び②に焦点をあてた。

調査結果より、連絡帳は保育相談支援のツールとして一定の役割を果たしていることが確認された一方で、子ども、保育士、クラスなど、個々の要因によって連絡帳業務の内容が大きく異なること、また連絡帳の「双方向性」を活かしきれていない可能性などが明らかになった。

今後の課題として連絡帳を保護者支援のツールとして活用するために、連絡帳業務の標準化、連絡帳による支援の体系化、連絡帳による支援を充実させる養成・研修の充実などの必要性について提起した。

キーワード：連絡帳、保護者支援、乳児保育、保育士、保育ソーシャルワーク

## I 研究の背景と目的

### 1. 保育所に求められる保護者支援

保育所や保育士にとって業務の拠り所となる保育所保育指針が、2017（平成29）年に改定された。1965（昭和40）年の制定以来、五度目となる今回の改定は、2015（平成27）年に施行された「子ども・子育て支援新制度」の子どもを社会全体で育てるという理念を踏襲し、保育所もその一翼を担う意味で、それまでの「保護者支援」から「子育て支援」へと表現が変化した。さらに改定のポイントの一つとして、「乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実」「保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性」が挙げられている。乳児期における保護者の関わりの重要性を考えた際、保育士が保護者に対する様々な保育・子育て上のアドバイスを行いながら、保護者と共に子どもを育てる姿勢がこれまで以上に求められており、保育所、及び保育士はますます積極的に保護者支援を行うことが求められていることが伺える。

もっとも、保護者支援や子育て支援など子育てに関わる家族を援助するという概念が誕生したのは1990年代

と、その歴史は20年にも満たない。1980年代ごろから核家族化が進行した結果、家庭における子育てに関する経験や知識が不足し、保護者の子育てに対する孤立感が高まった結果、牧野（1982）の「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の問題」という表現にも見られるように、子育て不安が高まった。その影響が「1.57ショック」に代表される少子化現象にもつながり、国全体として少子化に対する取り組みが開始されたわけであるが、保護者支援はそれ以降、現在に至るまで重要なキーワードとなっている。

このような時代の変化を受け、子育てに関して最も身近に位置する保育士は、専門職としての役割や機能、関わる範囲の拡大が求められ続けてきた。保育士の根拠法である児童福祉法は、1997（平成9）年の改正の際に「保育に関する相談に応じ、助言を行うこと」が努力義務として位置づけられ、わずか5年後の2002（平成14）年の改正では、「保護者への保育に関する指導」が保育士業務として正式に位置づけられた。これらの経緯から分かるように、保育所や保育士による保護者支援はまだまだ実践が十分に蓄積されているとはいえず、現場では模索が続いているのが現状である。

なお、保育所保育指針においては2008（平成20）年に行われた前回の改定以降、「保育所を利用している保護者」「地域の保護者」という大きく二つの対象に向けて支援が想定されていることには変わりがない。本論においては前者を対象とした関わりを中心に述べるため、「保護者支援」という表現を引き続き用いながら論を進めていく。

## 2. 連絡帳

### （1）連絡帳とは

丸目(2015)によると、連絡帳には明確な定義が存在するわけではないが、「保育園では昔から、口頭でのやりとりの不足を補うために連絡帳が活用されてきた」（二宮, 2010）など、補助的なツールとして捉えられることが多かったとしている。一方で、日本保育協会が2000（平成12）年に行った「保育所における家庭保護者との連携に関する調査研究報告書」において「家庭・保護者との連携で重視していること」として連絡帳を選択した回答が74.3%と最も多かったことや、「保育士と保護者の親睦を深める場」、「用途は多岐にわたる（西脇, 2006）」とあるように、「保育者と保護者を結びつけ、相互の情報の共有を図る重要で、もっとも活用されてきたツール」（剣持, 2005）ともいうことができ、保育現場における連絡帳の存在は非常に大きいと考えられる。

### （2）連絡帳に関する先行研究

連絡帳については様々な視点から研究が行われており、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーターCiniiにおいて「連絡帳 保育」をタイトルに用いた論文を検索したところ、2016年12月時点で40件が該当した。さらに論文・研究ノートに分類できない10件を除いた30件を

概観すると、件数の多い順に、本研究と同じく保育士—保護者間の関係性に焦点化した研究が9件見られた。その次に障害をもつ子どもの連絡帳に関する研究が6件、デジタル連絡帳など紙媒体でない連絡帳に関する研究が4件、養成教育において連絡帳を取り上げた研究が3件、子ども同士の関係性に焦点化した研究が各3件、医療に関する研究が各2件、外国人の保護者に関する研究が2件、そして連絡帳の歴史を取り上げた研究が1件と続いた。

本研究と同じく、保育士—保護者間の関係性に焦点化した9件の論文一覧について、各論文の連絡帳に対する捉え方、研究目的、研究方法、結果と考察、本研究との共通点・相違点について整理・概観した結果、表1のように連絡帳に関する研究を、年代別に3つのパターンに分類することができた。

パターンⅠは連絡帳を「保育記録のツール」と捉える研究である。主眼は子どもにあり、内容も子どもの健康状態や、基本的生活に関わる事項などに焦点があてられている。実態を把握する研究が多く、その中での連絡帳は「交流」の意味合いが強い。そもそも連絡帳が保育業務の一部であることを考えると、パターンⅠの研究は昔から存在し、これからも存在すると推測される。

パターンⅡは、保育所保育指針において保護者支援概念が出現した直後から見られる。それまでの連絡帳に対する認識は、子どもの成長記録として、保護者への保育指導で活用されるべきものであったが、パターンⅡでは主眼は保護者に移っており、連絡帳の果たす役割が、保護者と保育士の連携やコミュニケーション、関係性の構築や変容といった保護者支援を可能にする前提条件を作り出す役割に大きく拡大している。

パターンⅢは、保護者に主眼があり、連絡帳を保護者

表1 連絡帳研究における3つのパターン

	連絡帳の意味づけ	主眼	焦点をあてる連絡帳の記述内容	研究目的	連絡帳の役割・機能	研究
パターンⅠ	保育記録としてのツール	子ども	健康状態、基本的生活に関わる事項	実態の把握	交流	広沢ら（1996） 西垣ら（2004） 剣持ら（2005） 森本ら（2015）
パターンⅡ	保護者支援のツール	保護者	支援の前提条件（信頼関係など）の整備	実践の検証	連携・コミュニケーション・関係性構築や変容	林（2009）（2015） 二宮（2010） 高ら（2015） 半澤（2015）
パターンⅢ	保育ソーシャルワークのツール	保護者	保護者の不安や悩みの発見、解決（一部）	実践の意味づけ、意図をもった関わりを志向	支援	丸目（2015）

※筆者作成

支援のツールと考える点ではパターンⅡと共通点はあるものの、Ⅱの前提保持にとどまらず、保育相談支援の具体的方法の一つとしてソーシャルワークの視点や手法を取り入れ、連絡帳が問題発見、問題の一部を解決するといった支援そのものに活用できる可能性を探る意味で、保護者支援の意味合いが異なっている。本研究も、このパターンⅢに該当する。

### (3) 連絡帳を保護者支援のツールとして捉える意義

既に述べた通り、保育士に求められている保護者支援は、児童福祉法や保育所保育指針からも明確に示されているように、保育の専門性を活かしたものであるべきである。加えて、慢性的な人手不足、施設不足など、保育士が過酷な勤務負担を強いられている現状において、保育士の負担感を増さないことも重要である。さらにいえば、保護者支援は園長や主任など、一部の担当者のみが取り組むものという認識が保育現場において強いが、経験年数を問わず、新人からベテラン保育士まで幅広く行われている業務においても保護者支援のあり方を模索する意義は大きい。

連絡帳は、既に実践されているため、保育士の負担が増すものではないこと、行われている度合いの高さ、そして業務に関わる人数の多さを考えた際、連絡帳を保育と保護者支援の両方の意味をもつツールとして捉え直すことは、保育の業務改善だけでなく、保護者支援の具体的方法を見出すことにもつながり、両者の質的向上につながると考える。

## 3. 研究目的

本研究の目的は、保育士の専門性を活かした保護者支援の一つとして、保育所の乳児クラスを中心に古くから行われている連絡帳に焦点をあて、連絡帳が保護者支援を行うツールとして活用できる可能性を模索することである。具体的には、保育所で実際に記入されている連絡帳の記述内容を分析することにより、保育士が連絡帳を通じて行う保護者支援の実態把握を行った。調査全体としては、①記述文字数、②保育士と保護者の応答率、③記述内容のカテゴリー分類、④記述内容におけるソーシャルワーク的関わりの有無の4つについて明らかにする。本論文では①及び②を取り上げることとする。

## II 研究方法

### 1. 調査対象

#### (1) 分析の対象データ

大阪府内の民間保育所 A 園において調査の同意を得

た、2015（平成 27）年度に在籍する 0 歳児 8 名、1 歳児 16 名、2 歳児 7 人の合計 31 人を分析対象とした。

データの記録時期は 2015（平成 27）年 4 月 1 日～7 月 30 日の内容としているが、一部は、4 月と 7 月に限定している。その理由として、新年度や入所間もない、最も保護者の不安が高いと予想される 4 月と、数ヶ月が経過し、子どもも保育所での生活に慣れ、保護者も保育士との関係が構築できている 7 月を概観することで、連絡帳の使われ方がより重層的に把握できると考えたからである。

なお、データ収集を行う際、予め保育所側に子どものクラス、出生順位、主任保育士の判断により保護者の育児不安の高さを 3 段階で尋ねた情報も同時に得ている。

A 園の特徴としては、「0 歳児クラス」を除き、異年齢保育を実施している。年齢が異なる園児で構成される“縦”クラスの活動と、同じ学年の園児で構成される“横”クラスの活動が存在し、基本的には“縦”クラスによる活動が中心である。0、1、2、3 歳児は「乳児 A」、「乳児 B」、「乳児 C」クラス、3、4、5 歳児は「幼児 A」、「幼児 B」、「幼児 C」「幼児 D」クラスに在籍している。子どもの発達状況に応じてクラス移行を行うシステムをとり、0 歳児は歩行、3 歳児は着替え、排泄などの自立が可能になった時点で 0 歳児クラスから乳児クラス、乳児クラスから幼児クラスへ移行する。

本調査における調査協力園児の内訳は、乳児 A クラス 7 人（23%）、乳児 B クラス 16（52%）人、乳児 C クラス 8 人（26%）である。そして第一子が 18 人（58%）、第二子が 12 人（39%）、第三子が 1 人（3%）となった。育児不安については「高い」18 人（23%）、「普通」18 人（58%）、「低い」が 6 人（19%）であった。

#### (2) A 園について

A 園は、大阪のベッドタウンである B 市にある私立の認可保育所である。保育所の周辺には大きな工場があり、古くから居住する住民がいる一方、近年は大型マンションが多く建設され、転居してくる子育て世帯が増えている。通園児のほとんどは周辺地域に住んでいる一方、特色ある教育を提供する A 園に入所を希望して校区外から通園する家庭もある。

#### (3) A 園における連絡帳

A 園では、「0 歳児クラス」及び「乳児クラス」の子どもを対象に連絡帳の記入を行っている。連絡帳は、0 歳児クラス及び乳児クラスの担任が記入し、幼児クラスに移行となった時点で終了となる。記入は午睡の時間に行われ、0 歳児クラスは 5 人、乳児クラスは 1 クラスに

つき3人の担任が記入する。市販のB6サイズのノートに、①食事、②排泄、③午睡の時間が所定の記入事項とされ、その後に自由記述の欄が設けられている。加えて乳児クラスのみ、保育所でも家庭でも一日の生活リズムを書くことになっている。そのため0歳児クラスの保護者は前述したように家庭での生活リズムを書くことが必須となっているが、乳児クラスの保護者は連絡帳に対して記入することが推奨されているものの、任意となっている。

## 2. 分析方法

### (1) 記述文字数の分析

まず、全体的な傾向を把握するために、4月から7月にかけての全ての記述について、子どもの年齢、記述した月ごと、子どもごと、クラスごと、保護者の記述文字数、保護者の育児不安の高さの別に、保育士の記述文字数を測定した。

### (2) 応答率の分析

応答率とは、相手の記述内容における問いや話しかけに書き手が答えることである。例えば、「14日のマザークラスは何時からでしょうか」という保護者の問いに、保育士が「マザークラスは9時からとなっております。よろしくおねがいします」と応答した場合、応答「有り」と数えた。つまり直前の記述内容に対する言及の有無により、判断している。

## 3. 倫理的配慮

調査の実施にあたり、保育園には口頭および書面にて説明を行い、調査の協力に関する同意書を得た。次に、保護者に対しては本調査の目的と趣旨について書面で説明を行い、同意や協力が得られた園児の連絡帳のみを対象とした。

その際、プライバシー保護の観点から、個人情報の取り扱いには細心の注意を払い、一部のデータについては個人が特定されないため、内容に支障がない程度にデータの加工を行っている。なお、本調査は大阪総合保育大学研究倫理委員会の審査、承認を得て調査を実施した（児保研-003）。

## Ⅲ. 調査結果

### 1. 記述文字数に関する調査結果

#### (1) 記述文字数

##### ①子どもの年齢別に見る保育士の平均記述文字数

年齢別に見た平均記述文字数は、月ごとの差はそれほ

ど見られなかったものの、0歳児が137.6文字、1歳児が174.6文字、2歳児が166.9文字であり、一番記述文字数の多い1歳児と一番記述文字数の少ない0歳児を比較すると約20%の差が見られた（図1参照）。

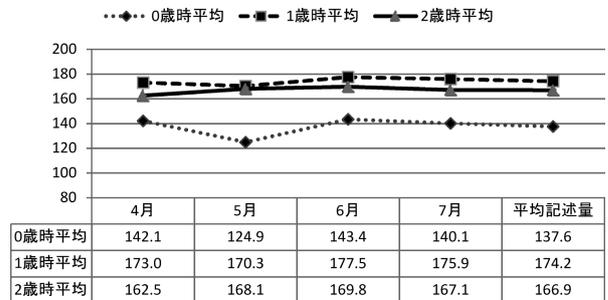


図1 年齢別、月別平均記述量（単位：文字数）

##### ②子どもごとに見る保育士の平均記述文字数

子どもごとの平均記述文字数は、表2、図2の通りである。子どもによって記述文字数に大きな差が見られ、記述文字数が最も多い子どもは平均すると206.8文字、少ない子どもは115.3文字となり、その差は91.5文字と大きく異なっていた。

表2 子どもごとの記述量

(単位：文字数)

		4月	5月	6月	7月	平均
記述量が 多い	A	221	182	200	224	206.8
	B	215	219	207	179	205.0
	C	196	199	209	185	197.3
記述量が 少ない	D	166	128	119	115	132.0
	E	135	116	122	128	125.3
	F	115	115	112	119	115.3

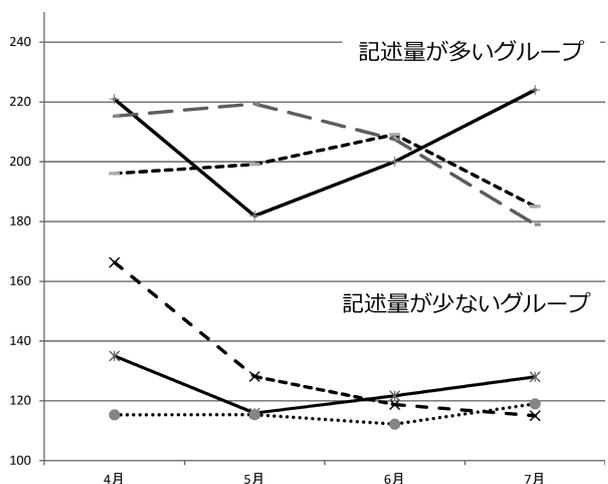


図2 子どもごとの記述量（単位：文字数）

③クラスごとに見る保育士の平均記述文字数

クラスごとの記述文字数を示したものは図3である。各クラスの平均記述数は0歳児クラス139.8文字、乳児Aクラス192.2文字、乳児Bクラス169.5文字、乳児Cクラス164.8文字であった。

クラス間に平均記述文字数の差が見られ、一番記述文字数の多いクラスと少ないクラスでは、最大52.4文字の差が見られた。

④保護者の記述文字数に見る保育士の記述文字数

保護者の記述文字数と保育士の記述文字数の関係を示したものが図4である。このようにみると、保護者の記述文字数の多さに関わらず、保育士の記述文字数は110文字を下回することはなく、保護者の記述量と保育士の記述量に、あまり関連は見られなかった。

⑤保護者の育児不安に見る保育士の記述文字数の関係

保護者の育児不安と保育士の記述文字数の関係を示したものが図5である。育児不安が高い保護者の平均記述数は175.7文字、育児不安が普通の保護者は159.6文字、育児不安が低い保護者は161.7文字であった。

保育士は育児不安の高い保護者に対して、そうでない保護者よりも約15文字記述文字数が多いことが分かった。

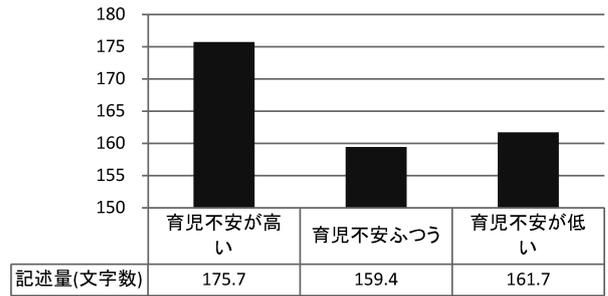


図5 育児不安と記述量 (単位：文字数)

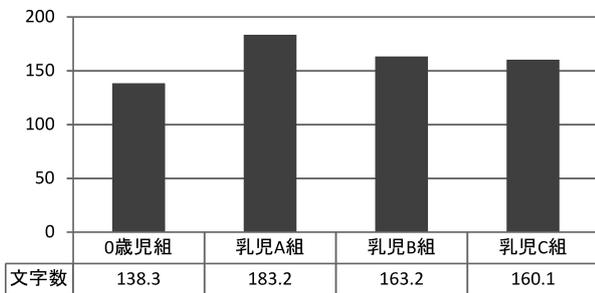


図3 クラスごとの記述量 (単位：文字数)

2. 記述文字数に関するまとめ及び考察

記述文字数に関するまとめとして、以下の点が明らかになった。

(1) 保育士が行う連絡帳は、年齢別、子ども別、クラス別により記述文字数に差が見られた

子どもの年齢、個々の子ども、クラスによって記述文字数に差があることから、様々な要因、その組み合わせにより影響を受けていることが推測された。記述文字数が多いことが良い、記述文字数が少ないことが悪いということは一概にいえない。しかし記述文字数の差は、保護者が得られる情報量の差、支援の差と言いかえることもできるので、今後はさらに記述内容を精査していく必要がある。

(2) 月別や保護者の記述文字数により、保育士の記述文字数の差は見られなかった

保育士の記述文字数は、月ごとの違いがそれほど見られず、また保護者の記述文字数に左右されないことから、保育士の記入内容に一定のパターンが存在する可能性があるといえる。0歳児の連絡帳について研究を行った森本・加用(2015)による、「保育者平均字数は106字～

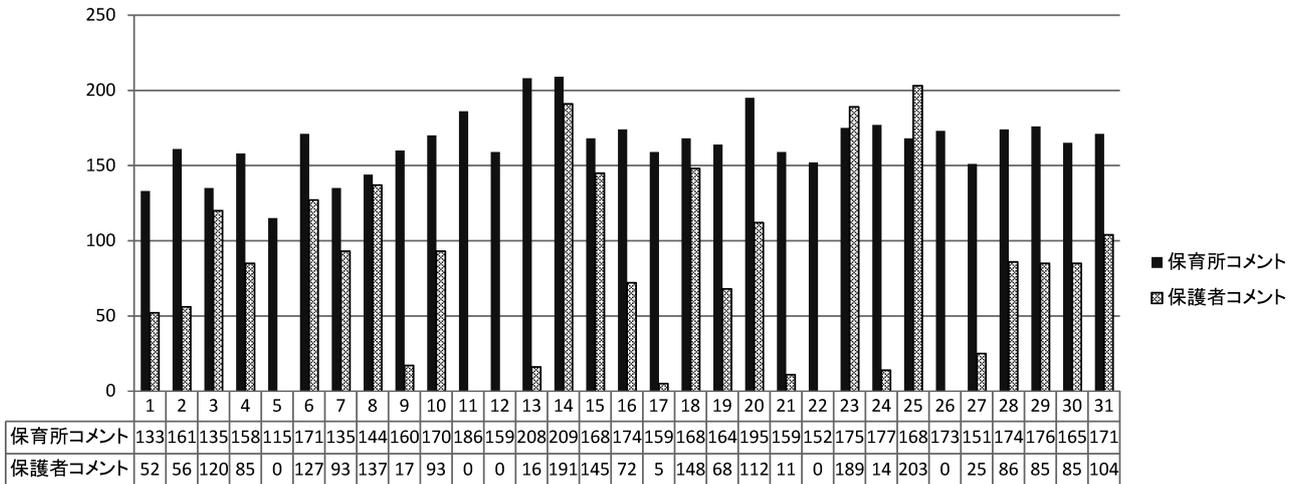


図4 保育所記述と保護者記述における記述量の関係 (単位：文字数)

186字]、「保育者の記述文字数に保護者の記述文字数が影響を受けているとはいえない」の結果とも概ね合致していた。もし記入内容に決まったパターンが存在するとすれば、連絡帳がもつ「双方向性」の強みが活かしきれていないともいえる。

(3) 不安の高い保護者に対する保育士の記述文字数は、他の保護者に対する記述文字数と比較して少し多かった

このことは、育児不安の高い保護者に対し、保育士が丁寧な関わりを行っていること、不安に寄り添っていることが推測され、連絡帳を通じた保護者支援が行われている可能性が確認できた。

### 3. 応答率に関する調査結果

(1) 全体の応答率

4月から7月までの全ての保育士と保護者の記述を対象に、保育士の記述内容に対する保護者の応答、そして保護者の記述内容に対して保育士がどの程度応答しているかをパーセンテージで表したものが図6である。

保護者、保育士ともに、平均すると約3割前後の応答率であった。保護者の方が、わずかではあるが、応答率が高い。保護者、保育士ともに、4月よりも、それ以降の月の方が応答率が高くなっていることが明らかとなった。

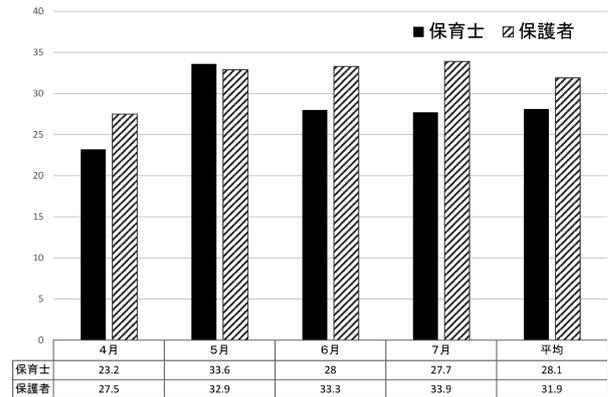


図6 保育士—保護者間の応答率（単位：％）

(2) 個別の連絡帳ごとに見た応答率

個別の連絡帳ごとに見た応答率としては表3の通りとなった。保育士の応答率は10.6～58.9%、保護者の応答率は10.0%～89.8%とかなりの開きがあることが明らかとなった。

保育所では、保護者も記述するよう推奨されているものの、31人中20人(65%)は記述を行い、11人(35%)が記述しておらず、すなわち応答のないパターンが約3分の1強も見られた。応答がない11人のうち、第一子は4人(36%)、第二子は7人(約64%)、第三子0人(0%)であった。育児不安については、「高い」が0人(0%)、「普通」が7人(64%)、「低い」が4人(36%)という内訳であった。

表3 調査協力園児

調査対象園児	年齢	クラス	出生順位	親の育児不安	保育士の応答率	保護者の応答率	応答性のパターン
1	0	B	2	2	41.0	20.0	II
2	0	A	1	2	39.6	20.9	II
3	0	A	1	3	58.5	23.8	II
4	0	B	2	2	33.3	66.6	III
5	0	B	1	2			
6	0	A	1	1	38.6	24.5	II
7	0	B	1	3	51.2	50.6	I
8	0	B	2	2	35.2	25.3	II
9	1	C	2	2			
10	1	C	3	2	41.1	18.2	II
11	1	A	2	3			
12	1	C	2	2			
13	1	A	1	2			
14	1	B	1	1	45.4	36.5	I
15	1	B	2	2	18.0	10.0	IV
16	1	C	2	2	10.6	30.6	III
17	1	B	2	2			

18	1	B	1	2	47.6	39.0	I
19	1	C	1	1	28.7	50.6	Ⅲ
20	1	A	1	1	58.9	37.3	I
21	1	B	2	3			
22	1	C	1	3			
23	1	B	1	1	37.9	52.1	I
24	1	A	2	2			
25	2	B	1	2	47.7	21.0	Ⅱ
26	2	B	1	3			
27	2	B	2	2			
28	2	C	1	1	38.9	89.0	I
29	2	C	1	1	30.9	89.8	I
30	2	B	1	2	25.0	86.4	Ⅲ
31	2	B	1	2	52.7	47.7	I

注：保護者のコメントが書かれていない、極端に少ない等の理由で応答率が10%以下の場合には割愛した

(3) 4つのパターンの人数の内訳

調査結果から、表3、図7のようにI. 保育士、保護者ともに応答率が高い場合、II. 保育士の応答率が高いが保護者の応答率は低い場合、III. 保育士の応答率は低いが保護者の応答率が高い場合、IV. 保育士、保護者ともに応答率が低い場合、の4つのパターンの中で、応答のない保護者を除くと、現状としてIのパターンが8人と最も多く、次にIIのパターンが7人、IIIのパターンが4人、IVのパターンが1人という順になった。

4. 応答率に関するまとめ及び考察

(1) 保護者の方が保育士よりも応答率が高い

保護者と保育士の応答率を比較した結果、保護者の方が保育士に比べて応答率が高いことが明らかとなった。このことは、ある意味で当然である。保育士がその日の出来事を中心に記入する連絡帳の場合、発信する側は保

育士であるため、その内容に対して保護者が記入する、というパターンが最も多いからである。

(2) 時間の経過とともに応答率が上昇する

そして4月と4月以降の応答率を比較した結果、4月以降の方が、応答率が高いことが明らかになった。4月は新入園、新しいクラスでの生活が始まるため、保育士、保護者ともに当初は連絡事項が多くなることが予想される。また連絡帳の中で気軽に質問や相談できるようになるのは、信頼関係が構築された後であることが多く、時間の経過とともに応答率が上がることは理に適っている。

(3) 応答がない保護者の存在が約35%みられる

応答が全くない保護者の存在が第一子、第二子ともに見られた。考えられる可能性として挙げられるのは、第二子の場合が6割を超えていたことから、育児に疲れている、または育児に追われて記述する時間がないことなどが推察される。第一子についても、同様に時間がない、もしくは育児に疲れて記述できないなどの理由が考えられる。育児不安との関係では、「育児不安が高い」保護者は全員記述があり、記述のない保護者の約6割強は「育児不安が普通」であった。育児に不安が特にないために保育士に特に尋ねることがないという理由も考えられる。残る約4割弱の「育児不安が低い」保護者も、育児に慣れているという理由のほか、育児に関心が薄い可能性もないとはいえない。

(4) 個別の応答率では、保育士、保護者ともに応答率は1～9割と大きな差が見られる

個別の応答率が、保育士の場合は約1割から6割、保

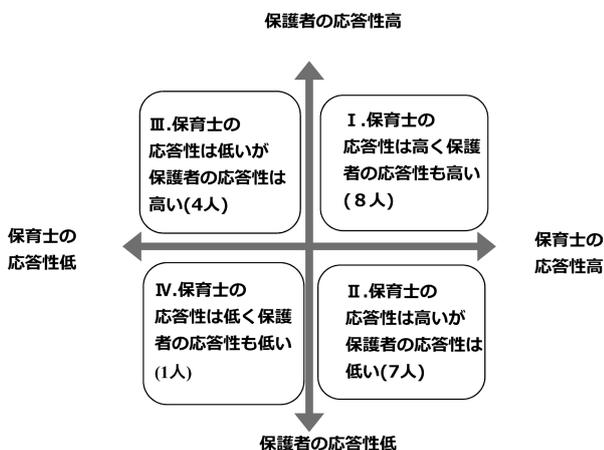


図7 保育士と保護者の応答率に関する4つのパターン

護者の場合は約1割から9割と個別差が大きいことが明らかとなった。応答率は読み手が書き手の記入内容についてしっかりと受け止めているかどうかが表示されるため、一定の高さは求められるべきである。特に低い場合のケースについては、内容を丁寧に精査する必要があると考えられる。

#### （5）全体的な応答率が約3割である

全体的な応答率が、保育士、保護者ともに約3割であることが明らかとなったが、3割という応答率が妥当であるか、または望ましい数値よりも高いのか低いのかについて、今回の調査で探ることはできなかった。特に保育士の場合は、限られた時間の中で記入できる量に限界があり、保護者の記述の全てに回答することは実際には難しい。また前項でも述べたように、保育士の間で連絡帳に関する書き方のパターンが存在すると推察されること、その日のうちに保育士から保護者に伝えたい内容が明確に存在する場合は、その内容を優先させる必要があることも予想される。今後、施設間による比較、経験年数間による比較など、もっとデータ数を増やして分析を続ける中で、より望ましい応答率が見出せる可能性もある。

#### （6）数値に反映されていない部分で、保育士は保護者の記述に対して丁寧に回答している

前述したように、数値の上では保護者の応答率や保育士の応答率を上回っているものの、前項（4）を見ると、応答性が高い保育士と低い保育士の割合は3：1であり、丁寧に回答している実態がみえる。

さらに個々の記述に目を通し、応答の有無を数える中で、保育士は問いかけや話しかけの形をとっていない保護者の記述であっても、不安や悩みなどに気づき、丁寧に回答していることが明らかになった。

例えば、「離乳食、十分がゆを一さじあげてみましたが、すぐにベーツと吐き出しました。ミルクのトラウマがあるので、すぐに諦めました」という保護者の記述に対し、「Mちゃん、最初は少しずつでいいですね。ゆっくり見守っていきましょう！保育園ではみんなが食べている様子をじっと見ていることがあります。いつか興味が出てくるのでしょうかね」と保育士が回答していた。保護者の失望、諦めの気持ちに寄り添いながら、保護者に子どもの変化を伝えることで再度取り組む気持ちになるよう支援していると考えられる。

このように、明確に回答を求められているわけではない記述に対しても、保護者の心情や状況を推し量り、丁寧に回答している場面が多く見られた。

## IV 総合的な考察

本研究では連絡帳を用いた保護者支援の可能性を探ることを目的に、実際の連絡帳の分析を行った。本論文では特に記述文字数と応答率に注目し、共通した現状と課題を見出すことができた。以下では総合的な考察を述べる。

### 1. 連絡帳を通して行われる保護者支援の有無

前項の2（3）、4（2）、（7）からも、保育士は連絡帳を通じて保護者支援を行っている可能性が高いことが明らかになった。

ただし、筆者が以前に行った連絡帳業務に関する保育士の意識調査から、保育士にとって連絡帳が保育相談支援のツールであるという認識は希薄であることが分かっている。

今後は、例えば連絡帳業務の中における“優れた取り組み（グッドプラクティス）”を検証し、既に行っている支援への気づきや、保護者支援に活用する見本としたり、より良い支援を行うための園内研修を行うなど、積極的、意図的に支援を行う意識を高めていくことが必要である。

### 2. 連絡帳業務に見られる個別差

前項の2（1）、4（4）から、連絡帳業務は個別性に富んでおり、どの保育士も同様の支援が行えるという現状には程遠い。したがって、現段階では標準化された業務とはいえない。

もっとも個別性に富む要因は、保育士側だけでなく、子どもや保護者の側にもある。子ども側の要因として考えられるのは、自己アピールの強さ、発達課題の有無などに代表されるような、子ども自身がもつ注目のされやすさの度合いである。次に保護者側の要因として考えられるのは、保護者の育児不安の度合い、保護者の記述文字数の多さ、保護者自身がもつ課題の有無、などである。そして保育士側の要因として、観察力、文章表現力など、インプット、アウトプット両面の能力のほか、問題に気づく、解決するなどの援助者としての視点や能力も関係している。対人援助はそもそも個別性が大きいことが前提であるが、一方で保育士側の要因については標準化できる要素が大きい。個別性と標準化のバランスを取りながら支援が行われるべきである。

### 3. 連絡帳を活用した支援の可能性

連絡帳のもつ「双方向性」を活かし、保護者支援はさらに質を高められる余地がある前項の2（2）、4（2）（5）

からは、連絡帳がもつ強みである双方向性をさらに高められる可能性が伺えた。連絡帳は限られた時間の中で複数の担任等が日替わりで記入するものであるため、暗黙のうちに一定の記入パターンが存在することも想像できる。しかし、保護者の応答は1つ1つ異なること、時間の経過とともに担任との信頼関係が深まり、保護者の不安や悩みは表出される可能性が高いため、個別性に富んだ記入内容が望ましい。

#### 4. 連絡帳を用いた支援の限界

連絡帳が支援のツールとして活用できる可能性が明らかとなった一方で、文字を媒体とする支援の限界にも留意しておく必要がある。

本研究は、連絡帳という文字を媒体としたコミュニケーションによる支援のあり方を模索するものであるが、一方で文字を通じた支援には一定の限界があることも忘れてはならない。連絡帳による支援が可能な役割と、そうでない役割が存在し、言いかえれば直接的なコミュニケーションにしか担えない役割が存在することは明確である。

また時代の変化により、メールやパソコンなどがコミュニケーション手段として利用されることが飛躍的に増えた現在、手書き文化の衰退が顕著になっている。文化庁が行った2014（平成26）年度の「国語に関する世論調査」において、日常生活において、文字を手書きする機会があるかとの問いに、「よくある」が38.2%、「時々ある」が34.4%、「余りない」が20.9%、「ない」が6.4%、「分からない」が0.1%であった。「よくある」を除いた、約6割強が文字を日常的に書かない生活だとすれば、今後保育士・保護者の双方に書くことを苦手とする人の増加が予想される。加えて、2015（平成27）年4月から施行された子ども・子育て支援新制度が開始されて以降、認定こども園や小規模保育事業など保育に関わる施設はますます多様化している。さらに技術の進歩やインターネット文化の普及・浸透にともなって、電子連絡帳、デジタル連絡帳などを活用する保育施設も今後は増加することが予想される。多様な保育施設、連絡帳の形態にも研究の範囲を広げる必要があると考えられる。

また、日本に暮らす外国人や国際結婚の増加などにより多文化保育の機会も増加している。富谷ら(2012)の研究において、外国人保護者にとって連絡帳は心理的、実質的な負担がかかることが明らかとなっているように、一定の割合で連絡帳が支援のツールとはなりにくい状況が予想される。

これらの状況に応じ、個々に望ましい支援のあり方を

模索していく必要があることはいうまでもない。

#### 5. 今後の課題

今後の課題として、図8の4点が考えられる。

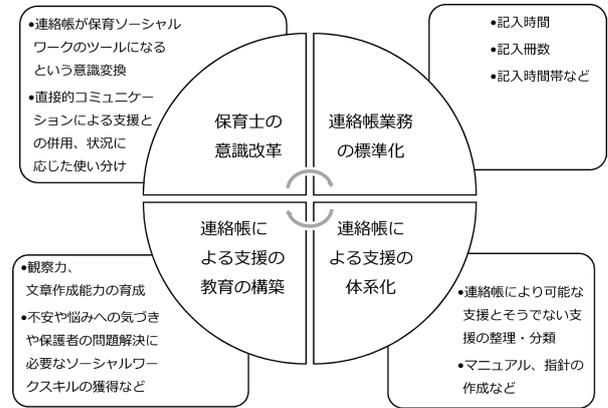


図8 連絡帳による保護者支援をより充実させていくための取り組み ※筆者作成

連絡帳の記述内容に関して個人差が大きい部分を改善するためには、連絡帳の記入にかかる時間などをはじめ、連絡帳における業務実態の標準化が必要である。そして連絡帳による支援の体系化として、連絡帳により可能な支援とそうでない支援の整理・分類を行い、連絡帳を通して支援が可能な機能を中心にマニュアルや指針づくりを行うことも有用である。その作業と同時に、保育士養成における教育内容や現任研修の構築化が行われるべきであり、それらの教育や実践を通して保育士の意識変革も進むと考えられる。もし連絡帳が保育相談支援のツールであるという認識が浸透すれば、連絡帳は今以上に活用され、保育の専門性を活かした支援として、質的に大きく向上することは確実である。

#### V おわりに

筆者がこれまでに行った保育士を対象としたアンケート調査などの研究を通して、そして実際の連絡帳を分析した今回の研究においても、連絡帳が保育相談支援のツールとして十分に活用可能であることが確認できた。次の研究では、連絡帳の記述内容を分析することにより、保育士の記述が保護者の不安や悩みに対応し、支援できていることを検証する予定である。このように「現場実践」を「研究」に関連させ、さらには「教育」につなげることが重要である。

現任教育に関していえば、保育所保育指針の改定と同時に、2017（平成29）年から保育士が専門職としての資質向上を図るキャリアアップ研修がスタートした。これ

まで資格取得後のスキルアップは職場や個人により大きく異なっているのが現状であったが、枠組みとして処遇改善と連動する形で行われるため、保育士全体の専門性向上に一定の効果が予想される。「保護者支援・子育て支援」も専門分野の一つに含まれていることから、多様化・複雑化する時代情勢、そして保育現場の実状に即した、具体的な支援方法について学びが得られる可能性が高く、その意味で連絡帳もその一つとして、将来的に支援のあり方を確立させたいと考える。

#### <引用文献・参考文献>

- 文化庁（2014）国語に関する世論調査, 8.
- 半澤幸恵（2015）保育所における幼児連絡帳にみる保育者と保護者の関係変容プロセス 中部教育学会紀要, 15, 30-39.
- 林悠子（2009）連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程 乳幼児教育学研究, 18, 121-132.
- 林悠子（2015）保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義 保育学研究, 53(1), 78-90.
- 広沢洋子・清水玲子他（1996）保育者と保護者の相互交流－連絡帳を通して 運動・健康教育研究, 6(1), 8-14.
- 剣持安里・山内紀幸（2005）保育者と保護者の連携：0歳児～2歳児の連絡帳のメッセージ分析を通して 山梨学院短期大学研究紀要, 26, 43-53.
- 高向山（2013）保育所（3歳未満児クラス）と家庭を結ぶ連絡帳：昭和後期から平成における通時的考察 健康プロデュース雑誌, 7(1), 39-45.
- 高向山・若尾良徳（2015）保育所と家庭を結ぶ連絡帳：対人コミュニケーション機能に注目して 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 9(1), 93-98.
- 厚生労働省（2017）保育所保育指針.
- 厚生労働省（2017）保育士等キャリアアップ研修の実施について.
- 牧野カツコ（1982）乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉家庭教育研究所紀要, No. 3, 34-56.
- 丸目満弓（2015）保護者支援の前提となる保育士と保護者間コミュニケーションに関する現状と課題—保護者アンケートを中心として— 大阪総合保育大学紀要, 9, 173-194.
- 丸目満弓（2015）保育ソーシャルワークのツールとしての連絡帳活用の可能性について 保育ソーシャルワーク学研究, (1), 25-40.
- 森本美絵・加用美代子（2015）0歳児保育において連絡帳で何がかわされているのか：連絡帳の意義・再考に向けた探索的研究 京都橘大学研究紀要, 42, 73-90.
- 無藤隆（2017）ここが変わった！3法令改訂（定）の要点とこれからの保育 チャイルド本社.
- 日本保育協会（2000）保育所における家庭・保護者との連携に関する調査研究報告書 [http://www.nipp.or.jp/cyosa/12\\_04/04\\_ta.htm](http://www.nipp.or.jp/cyosa/12_04/04_ta.htm)（2016年12月1日）
- 二宮祐子（2010）保育者－保護者間のコミュニケーションと信頼－保育園における連絡帳のナラティブ分析 福祉社会学研究, 7, 140-161.
- 西垣吉之・山田陽子他（2004）保育における育ちをとらえる視点に関する一考察：『つなぐ』行為から 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 5, 41-56.
- 西脇二葉（2006）家庭と保育者との連携における連絡帳の役割に関する研究：保育園児の人間関係に着目して 武蔵野短期大学研究紀要, 20, 203-209.
- 富谷玲子・内海由美子・仁科浩美（2011）子育て場面で外国人保護者が直面する書き言葉の課題：保育園・幼稚園児の保護者を対象とした調査から 神奈川大学言語研究, 34, 53-71.

## Research on Parent Support System in the Field of Infant Day Care (1)

: Focusing around the Number of Characters in Description Contents  
in Communication Notebooks and the Response Rate to them  
between Childcare Workers and Parents

Mayumi Marume

*Child-rearing support social work laboratory*

Amendment to the Guideline for Childcare in Child Day Care Centers in 2017 focuses on points including “increase in description contents about day care for infants under 3” and “need for child-rearing support in cooperation with parents / families and communities”. In this sense, it is significant to utilize communication notebooks, which have been traditionally used mainly in infant classes, as tools for child-rearing with their parents and also as tools for parents support.

In this study, we learned the current status of parents support provided by childcare workers through communication notebooks, by analyzing their description contents filled actually in child day care centers. The entire survey found out 1) the number of characters in description contents, 2) the response rate between childcare workers and parents, 3) category classification of their contents and 4) presence / absence of social work functions in their contents. This article focuses on 1) and 2).

The results of the survey confirmed that communication notebooks played the role of parent support, while they showed that there was great difference in tasks relating to communication notebooks for each infant, each class, each childcare worker or other particular elements and that the bidirectional interaction of communication notebooks might not be fully exploited.

We presented, as future challenges, needs for standardization of tasks relating to communication notebooks, systematization of parent support through communication notebooks and additional training for enhanced support through communication notebooks, in order to utilize them as tools for parent support.

**Key words** : communication notebooks, parent-support, infant day care, nursery school teachers, child care social work

